

学生生活の研究 : 1. 卒業後から見た大学生活の満足度

山田, 裕章
九州大学健康科学センター

冷川, 昭子
九州大学健康科学センター

峰松, 修
九州大学健康科学センター

<https://doi.org/10.15017/356>

出版情報 : 健康科学. 2, pp.155-162, 1980-03-30. 九州大学健康科学センター
バージョン :
権利関係 :



学 生 生 活 の 研 究

1. 卒業後から見た大学生活の満足度

山 田 裕 章
冷 川 昭 子
峰 松 修

The Investigation of College Life :

(1) College Life Image in Graduates

Hiroaki Yamada, M.D.
Akiko Hiyakawa
Osamu Minematsu

はじめに

青年期の後期に属する大学生は、大学生活中に身体的にも心理的にも大きく成長する。いわゆる子供から大人へ脱皮するための重要な段階である。この時期の健康管理は身体的には将来の成人病予防対策として、また心理的には自分自身をしっかりと見つめ、自分の生き方を決定するための悩み多い世代として非常に重要性をもっている。その意味から、この時期を青年期後期の一横断面でとらえるよりも、青年期のはじまりから成人期に至るまでの人間の Life-cycle の一部としてとらえ、その対策を考える必要がある。すなわち青年期の健康に関与するさまざまな要因を調べ、確定しておかなければならない。

この調査研究は、大学を卒業して社会人となった人々が、自分の大学生活を振り返ってみて、大学にどのような意義を見出したのか、大学生活の満足度や健康状態をどのように評価しているかということを知ることにより、現在の在学学生に対する種々の援助のあり方の参考にする目的でおこなった。また、青年期の健康指標を作るために、青年期の健康や満足感をしらべる予備調査としての側面をもっている。

対象および方法

対象となった母集団は、昭和42年から昭和51年まで

の10年間に九州大学を卒業した16,865名の卒業生である。この母集団の各学部構成人員の割合を変えないようにして、各卒業年度ごとに卒業生名簿より100名ずつ無作為抽出をおこない、10年間で1,006名（男性909名、女性97名）をえらんだ。この1,006名に対して後述するようなアンケート用紙を郵送した。アンケートの回収数は329通（32.7%）で、転居先不明148通（14.7%）であり残りの529通（52.6%）は回収できなかった。一般に郵送法によるアンケート調査の回収率は20—30%と言われており、本調査の回収率32.7%は平均的なものである。

アンケートは藤土らが中四国地方の国立大学卒業生に対しておこなったものを基本にこれを大巾に改変したものを用いた。その主な内容をつぎに示す。1. 大学生活の満足度、2. 進路変更、3. 留年・休学、4. 在学中および現在の健康状態、5. 現在の仕事、6. 在学中における危機、7. その他。

これらの項目に関する質問に対して用意された選択肢を選ばせ、さらに自由記述の欄を用意した。

結 果

アンケートの結果は大まかに区分すると大学生活に関する部分と現在の生活に関する部分の二つに分けられる。本稿では大学生活に関する部分の解析をおこなった。

大学生生活の満足度

大学生生活における満足度という問題は、漠然としているが、卒業して社会人として働いている立場から自分の大学生生活が有意義であったかどうかを満足度の一つの指標としてみた。設問および選択肢は附図1に示されている。結果の分析は附図1のように満足群、普通群および不満群の3群とした。

有効回答数328のうち満足群219(66.8%)、普通群42(12.8%)および不満群67(20.4%)であった。すなわち約80%の者は大学生生活は有意義であったと考えていることになる。全群を2つに分け、在学中特に問題もなく、正規の修業年限をストレートで卒業した者を対照群とし、在学中に留年又は休学を経験した者を留年・休学群とした。この両群の間に大学生生活の満足

表1 大学生生活の満足度

群	満足度	満足(%)	普通(%)	不満(%)	合計(%)
対 照 群		184(67.2)	30(10.9)	60(21.9)	274(100)
留年・休学群		35(64.8)	12(22.2)	7(13.0)	54(100)
合 計		219(66.8)	42(12.8)	67(20.4)	328(100)

注：対 照 群……正規の修業年限で卒業した者
留年・休学群……留年又は休学した者

度に差があるかどうかをみたものが表1に示されている。両群とも「満足」の割合は変わらないが、留年・休学群では「普通」の割合が多く、逆に「不満」の割合が少くなっている。すなわち留年・休学群ほど大学生生活に対する不満の割合が低い。これは学生時代の留年・休学をネガティブな面ととらえず、むしろ積極的なポジティブな面で評価を与えているためのようである。

表2 大学生生活の満足度とその理由(全群)

理由	生活態度	学業	クラブ活動	自己の生活	健康	家庭生活	その他
満足	140	99	79	57	17	2	22
普通	21	22	16	15	3	0	0
不満	27	52	25	26	2	1	4
計	188	173	120	98	22	3	26

大学生生活の満足度の理由について7項目の選択肢から複数の回答を選ばせた結果が表2に示されている。全群の結果から多い順にあげると1. 大学時代の生活態度・人生観、2. 学業、3. クラブ活動、4. 自己の生活の順である。これを満足度の群別でみると、満

足群では第1位は生活態度・人生観、第2位は学業の順になるが、不満群では第1位学業、第2位生活態度・人生観、第3位クラブ活動の順となる。すなわち大学生生活不満群では、不満の理由で最も多いのは学業に関するものである。これは後述のように自己の勉強不足に対する不満が主なものである。満足度の理由につ

表3 大学生生活の満足度とその理由(男性)

理由	生活態度	学業	クラブ活動	自己の生活	健康	家庭生活	その他
満足	126	89	72	49	17	2	22
普通	20	19	15	13	3	0	0
不満	24	45	22	23	2	1	3
計	170	153	109	85	22	3	25

表4 大学生生活の満足度とその理由(女性)

理由	生活態度	学業	クラブ活動	自己の生活	健康	家庭生活	その他
満足	14	10	7	8	0	0	0
普通	1	3	1	2	0	0	0
不満	3	7	3	3	0	0	0
計	18	20	11	13	0	0	0

いて男性と女性に分けてみたのが表3、表4および図1である。女性の大学生生活に対する評価は、満足群も不満群も第1位は学業であり、第2位は生活態度・人生観、第3位は自己の生活であり、男性で第3位であったクラブ活動は女性では第4位に落ちている。調査対象の中で女性は男性の10分の1程度であるため、男性と女性をそのまま比較することはむづかしいが、傾向として言えることは女性は男性と違って友人達との仲間意識や集団帰属感を重視するより、むしろ自己の勉強や成績という個人的な面に固執するようである。しかし男性でも同世代の友人達とのつき合いの中で次第に確立してゆく人生観や生活態度なども、ある程度以上の充実した学業がなされていることが重要な前提条件となっているように思われる。

アンケートの選択肢以外の自由記述の項目をみると、最も多いのは大学生生活の中での「集団を媒介とした友人との相互支持、相互啓発」の評価である。この中で大学におけるサークル活動、クラブ活動に対して極めて高く評価している。「クラブ活動により、異質な世界への関心を得たことは有意義であった。それが在学中継続し、現在も人生におけるバックボーンとな

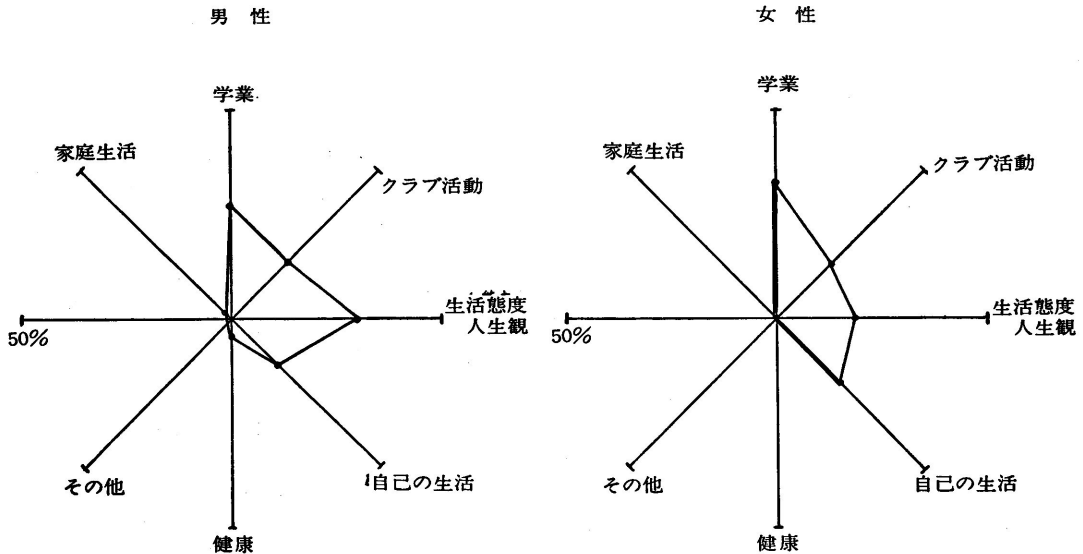


図1 大学生生活の満足度の理由

っている。」「サークル活動を通じて得られた先輩や友人達は貴重なものであり、社会に出て役立っている。」「サークル活動を通じて一緒に楽しんだり、悩んだり、裸でぶつかりあえる人間関係ができた。」等である。ここには過ぎし日の懐しい青春の哀歓が漂っているようである。つぎに多いのは大学生活での「不充実感」である。「学生時代に一つのことにうちこむことがなく、何となく単位を取得して卒業してしまった。」「受身的な勉強しかしなかった。もっと積極的に目標を作り、学問すべきであった。」「学業は今少し掘り下げてやっておけばよかった。」「もっと集中的に勉強できるテーマを見つけるべきだった。」等に代表される記述である。現在の学生の特徴の一つは、物事に対する受身性、目的意識の希薄化および点数主義などがあげられることが多いが、これらの点に関して社会人となった卒業生たちから痛烈な反省が数多く寄せられていることは重要な意味をもっているように思われる。第3にあげられるのは大学における「専門的・学芸的知識の評価」、「自分自身の物の見方の確立」および「少数の友人間での相互支持、相互啓発」などである。この三点はほとんど同数の支持を得ている。大学生活における満足度の自由記述を分析してみると、これはさきの選択肢「生活態度・人生観」の項目を敷衍したもの以外にない。大学生活において重要なことは学業もさることながら、友人、先輩、後輩のふれ合いにあるとすれば、学生全員が何らのサークルに所属することが好ましいようである。このような考え方はいわゆる「旧き良き時代」の旧制

高校のイメージに似ている。現在の大学にこのような機能が要求されるのは中学・高校を通じた受験体制からは人格形成の場が与えられることが少ないためであろう。現在の大学の機能は一方ではこのような人格形成の場であり、他方では高等職業教育であるとすれば、いわゆる「真理の探究」は大学院以上のレベルでおこなうことになるのも現状ではやむを得まい。

学生時代の健康度

大学在学中と現在の健康状態について附図2に示すような質問をおこなった。結果は「非常に…」および「比較的…」をまとめ、「健康」および「不健康」に分けた。「普通」は「健康」に分類した。学生時代に健康であったと答えた者は326名中281名(86.2%)であり、不健康であったと答えた者は45名(13.8%)であった。不健康の内訳は身体的なもの14名(4.3%)、精神的なもの25名(7.7%)および身体・精神ともに不健康であった者6名(1.8%)であった。すなわち約14%の者が不健康であり、その70%は精神的なものが占めていた。これを藤土の結果と比較すると、藤土の「比較者群」217名のうち、不健康であったと答えた者は24名(10.9%)であるから大体同様な傾向にあると言えよう。全群を対照群と留年・休学群の2群に分けたものが表5および表6に示されている。留年・休学群には不健康であったと答えた者の割合が高く、対照群の約2倍に達している。不健康の内訳は身体的なもの3に対し精神的なもの7の割合になっている。ここで「不健康」とは具体的にはどのようなものを指

表5 学生時代の健康度 (対照群)

	健康 (%)	不健康				合計 (%)
		身体的 (%)	精神的 (%)	身体+精神 (%)	小計 (%)	
男性	216	8	13	4	25	241
女性	23	2	5	1	8	31
	239 (87.9)	10 (3.7)	18 (6.6)	5 (1.8)	33 (12.1)	272 (100.0)

表6 学生時代の健康度 (留年・休学群)

	健康 (%)	不健康				合計 (%)
		身体的 (%)	精神的 (%)	身体+精神 (%)	小計 (%)	
男性	41	4	7	1	12	53
女性	1	0	0	0	0	1
	42 (77.8)	4 (7.4)	7 (13.0)	1 (1.9)	12 (22.2)	54 (100.0)

すのか自由記述から見てみよう。「身体的不健康」のうち身体疾患があった者は8名であった。その他に片寄った食生活など「生活リズムの乱れ」が4名であった。「精神的不健康」のうち最も多いのは自己同一性にかかわる問題とよばれるもののようであった。

「……自分は何をなすべきかという問題について、人生の進路を含めて非常に不明確であった。」「入学直後から、自分は何を得るために大学に入ったのか、毎日何をしたらいいのかということにまどい、学問することに対して全く意欲を失っていた。」「大学生生活を中学、高校の延長と考えていたため、自分自身の人生観・生活観を見出せなかった。そのため自己の世界を広げる時期を逸してしまった。」等自己の目的を見失い、意欲を失ってしまった状態を「精神的不健康」と評価した者が多かった。その他一部に自己の性格についての悩みや、いわゆる神経症状態が含まれていた。

学生時代の健康度と大学生生活の満足度

学生時代に健康であった者および不健康であった者について、大学生生活の満足度という面から見たものが表7に示されている。健康であった者の71.5%は大学生生活に満足しているが、不健康であった者はその40%が大学生生活に満足したに過ぎない。このうち、精神的に不健康であった者の満足度は32%である。このことは大学時代の精神的な不健康が、大学生生活の満足度に大きな影響を与えていることを示している。

大学生生活が非常に不満であった者のうち、学生時代

表7 学生時代の健康度と大学生生活の満足度 (全群)

	健康 (%)	不健康			
		身体的 (%)	精神的 (%)	身体+精神 (%)	小計 (%)
満足	201 (71.5)	9 (64.3)	8 (32.0)	1 (16.7)	18 (40.0)
普通	35 (12.5)	1 (7.1)	2 (8.0)	4 (66.6)	7 (15.6)
不満	45 (16.0)	4 (28.6)	15 (60.0)	1 (16.7)	20 (44.4)
合計	281 (100)	14 (100)	25 (100)	6 (100)	45 (100)

に不健康であったと答えた13名についてその自由記述を見るとつぎのようであった。最も多い記述は「明確な人生観や自己の将来についての考え方、目的を持てなかった」とする自己同一性に関する悩みであり7名にみられた。また他の学部に興味をもったが進路変更ができずに大学生生活が不満であったと答えた者が3名いた。他の3名はさまざまな理由のため不満を訴えていた。これら不満の内容を見ると、そのほとんど大部分は自分自身の問題のために大学生生活が不満であったと答えている。大学の学問のあり方や雰囲気に関心したと答えたのはわずか1名に過ぎない。対象となった卒業生の中には大学紛争を経験した者も含まれているはずであるが、アンケートの回答を見るかぎり、大学そのものに対する批判はほとんどなかったことは予想外であった。

進路変更

大学における学業の成果は、その学問に対する興味と関心の強さによって著しく異なる。九州大学では原則

表8 進路変更の希望の有無と大学生生活の満足度

進路 変更	大学 生活			
	満足 (%)	普通 (%)	不満 (%)	合計 (%)
希望なし	172 (67.5)	34 (13.3)	49 (19.2)	255 (100)
希望あり	42 (62.7)	7 (10.4)	18 (26.9)	67 (100)

として入学後の進路変更は不可能であるが、表8に示されるようにアンケートによれば322名中67名(20.8%)に進路変更の希望をもった者がいた。その内訳は最も多いものは入学時に第2志望にまわされた者、あるいは自分で第2志望に変えた者であり、この半数は医学部志望であった。つぎに多いのが「教師になりたい」、「建築家になりたい」などの職業志向タイプで

あった。また在籍学科が不満で、他の学部、学科に興味があった者が30%に達していた。当然のことながら進路変更の希望をもった者は大学生活の不満の割合が高く、26.9%に達していた。

進路の変更は大学としてさまざまな理由から実現は困難のようであるが、アンケートの回答者の20.8%に進路変更の希望があったことは注目に値する。高校卒業時の18.9才で自己の適性や興味を見出すことは困難であり、入学試験の成績のみが進路を決定し、就職先の範囲を限定することには問題があろう。進路の変更には柔軟な対応が望まれるようである。

留年および休学について

在学中に留年または休学の経験者は前記の表1の「留年・休学群」に分類されている。このうち、その理由が明らかになったのは46名であった。休学者3名のうち、身体疾患によるもの2名、留学1名であった。留年者は昭和38年入学から昭和47年入学までの10年間に44名である。この10年間に留年が最も多かったのは昭和45年入学の8名で、つぎに昭和42年入学の7名である。昭和43年、44年はそれぞれ5名づつである。留年のピークは大学紛争のはじまりと終りにある。留年

表9 大学生活の満足度と留年理由

留年理由	積極的 (%)	消極的 (%)	その他 (%)	計 (%)
満足度				
満 足	2 (33.3)	25 (71.4)	0 (0)	27 (62.8)
普 通	3 (50.0)	7 (20.0)	1 (50.0)	11 (25.6)
不 満	1 (16.7)	3 (8.6)	1 (50.0)	5 (11.6)
計	6 (100)	35 (100)	2 (100)	43 (100)

注：教養部における留年 26名
学部における留年 17名

の理由はさまざまであるが、ここでは積極的留年（留学、受験など positive な価値をもつもの）と消極的留年（単位不足、就職の意欲がわからないものなど negative なもの）に分けてみると、前者が14%、後者が81.4%、その他4.7%となり、大部分は消極的留年であった。このような消極的留年でも大学生活の満足度は表9に示されるように満足したもの71.4%であり、不満は8.6%に過ぎない。留年という事件は大学生活の満足度に対して予想されるほど影響を与えていないようである。

在学中の危機と相談

質問はつぎの通りである。「あなたは、在学中に就学にさしつかえるような問題（たとえば病気とか、進路適性とか、精神的危機など）にぶつかったことがあ

表10 学生時代の健康度と危機的状況

健康度	危機あり (%)	危機なし (%)	計 (%)
健 康	26(9.3)	255(90.7)	281(100)
身体的健康 精神的不健康	10(40.0)	15(60.0)	25(100)
身体的不健康 精神的健康	4(28.6)	10(71.4)	14(100)
身体的健康 精神的	3(50.0)	3(50.0)	6(100)
計	43(13.2)	283(86.8)	326(100)

りますか。」表10に示されているように、「危機があった」と回答した者は326名中43名（13.2%）であった。これを学生時代の健康度と関連させてみると、「危機があった」と答えた者には学生時代に健康であった群の中には極めて少なく、その9.3%に過ぎない。学生時代に精神的不健康であった者の40%に「危機があった」と答えている。ところがこのような問題の解決のために学内の教官や援助機関（カウンセリングルーム、保健室、保健管理センター、学生掛など）に相談に行った者は11名（25.6%）に過ぎない。相談に行かなかった理由のうち最も多い（17名）ものは「……結局自分自身の問題なので自分で解決したかった。」という自主解決型であった。その他に「適切な回答が得

表11 学生時代の健康度と学内援助機関の利用

利用の有無	相談あり (%)	相談なし (%)	計 (%)
健康度			
健 康	3(1.1)	276(98.9)	279(100)
身体的健康 精神的不健康	4(16.0)	21(84.0)	25(100)
身体的不健康 精神的健康	1(7.1)	13(92.9)	14(100)
身体的不健康 精神的	3(50.0)	3(50.0)	6(100)
計	11(3.4)	313(96.6)	324(100)

られるとは思わなかった」者や援助機関の存在を知らなかったと答えた者もいた。学内の援助機関の利用については表11に示されている。この種の機関を利用した者は、精神的不健康であった25名中4名（16%）、身体的不健康であった6名中3名に過ぎない。これを見るとさまざまな悩みをかかえた学生のうち、専門家

に相談した者はごくわずかの数であり、残りの大部分は自分自身で解決しようとしたことがわかる。しかし、一方ではこれらの人々の大学生生活の満足度は低く、他人の助けを借りずに自分自身の力で解決しようと努力したが、大学生生活は必ずしも満足できなかったようである。ここに専門家の介入する余地がありそうである。

満足度に関して

ある事柄についての満足感の評価は、それに似た事

表12 大学生生活の満足度と現在の仕事に対する満足度

現在の 仕事 大学生生活	満足 (%)		普通 (%)		不満 (%)		計 (%)
	満	足	普	通	不	満	
満 足	177	(72.8)	46	(18.9)	20	(8.2)	243(100)
不 満	31	(47.7)	17	(26.2)	17	(26.2)	65(100)

柄についての評価と同様な傾向をとりやすい。大学生生活に関する満足度と現在の仕事に対する満足度を関連させたものが表12に示されている。大学生生活が満足であった者のうち、現在の仕事に満足していると答えた者はその72.8%であり、不満であると答えた者はその8.2%に過ぎない。これと逆に大学生生活が不満であると答えた者のうち、現在の仕事に満足している者はその47.7%であり、不満な者は26.2%に達する。大学生生活が不満であり、現在の仕事も不満であると答えた者の半数以上は、常に現状に満足しないという傾向があるように思われる。

健康生活を妨げる要因

学生時代をふりかえて、心身の健康な生活をおくために支障をきたすような行動や考え方にどんなものがあるかを自由記述させた。全回答102のうち上位5項目あげるとつぎの通りである。1.運動不足(52.0%)、2.性格の悩み(13.7%)、3.人生感、自己同一性にかかわる悩み(11.8%)、4.生活リズムの乱れ(10.8%)、5.勉強固着(5.9%)。第1位の運動不足は自分の努力によって解消することができるが、第2位、第3位のような自己の内面の悩みが全体の約4分の1を占めていることは注目に値する。前に述べたように悩みがあっても学内の援助機関を利用する者が少ないのであるが、少なくとも心身の健康を妨げる要因となっている程度の悩みに対しては大学としてもその援助対策を考えねばならない。

在学中の学生に対する助言

アンケートの最後に、健康に関して存学中の学生に対する助言を求めた。助言として最も多かったものから順にあげるとつぎの通りである。(1)スポーツをする。(2)信頼できる友人をつくる。(3)規則正しい生活をする。(4)食事に気をつける。(5)団体生活(クラブ活動など)をする。(6)学業をおろそかにしない。(7)趣味をもつ。ここでもスポーツ、クラブ活動の重要性が力説されている。アンケートに記述された項目は実に当然のことである。適当にスポーツをやり、規則正しい生活リズムをもつこと。信頼できる友人をもつこと。などは以前から言われていることであるが、改めてここに出て来たのはこの当然なことが現在では学生時代になかなか守り難いからであろう。

おわりに

大学を卒業した卒業生が、自分の学生生活をふり返ってみて大学生生活にどのようなイメージを抱いたかということ調査した。大学生生活についての意見は在学中の学生達のなまの意見よりも、社会人となった目で学生生活を振り返ってみる方がよりクールな意見が出る可能性があるからである。ここでは大学生生活の満足度と健康度について分析をおこなってみた。この調査は実は予備的なものである。青年期の健康という問題にとり組む前に、すでにわれわれが日常的におこなっている学生の健康管理を通じて、学生集団の大学生生活の満足度や健康度をとらえておく必要性を感じた。ここで出て来たいくつかの特徴が、他の大学や一般の青年達の考え方と同じであるかどうかはわからない。もっと範囲をひろげて調査をおこない、「学生集団」としてのイメージを浮びあがらせたいと思っている。

ここでは、少なくとも九州大学の卒業生たちの大学生生活に対するいくつかの考えがわかった。それを列挙してみるとつぎの通りになる。

1. 卒業生の約80%は大学生生活は有意義だったと評価した。

2. 留年・休学を経験した者の方が大学生生活に対する不満が少ない。

3. 大学生生活が満足であった理由は、(1)大学生生活での生活態度や人生観、(2)学業、(3)クラブ活動である。女性の場合は男性と異り、大学生生活が満足でも不満でも、その理由は「学業」が第1位を占めている。

4. 学生時代に不健康であった者は約14%いた。その内訳の70%は精神的な不健康であり、この群の人々の大学生生活に対する満足度は低かった。

5. 進路変更の希望をもった者は約21%に達した。
これらの人々の大学生生活の満足度は低かった。

6. 在学中に就学にさしつかえるほどの危機を経験した者は13%であった。この大部分は精神的なものであった。しかしこれらの悩みをもっているも学内の援助機関に相談した者は少なく、ほとんどが自分自身で解決しようとした。

以上が大学生活に関する意見である。これらの意見をもった卒業生たちの現在の状況についての分析は稿を改めて報告する。

稿を終るにあたり、資料の電算機処理をおこなっていただいた工学部情報工学科の樽美和幸氏および資料の整理をお願いした宮原芳子さんに感謝します。

参 考 文 献

藤土圭三：大学卒業生の保健に関する基礎的研究，
Phoenix-Health, No. 11, 60-72, 1977。

附図 1

I (イ) あなたの大学生生活をいまふりかえてみて、どう感じていますか。次のいつれかに、○印をして下さい。

- | | | |
|----------|------------|---------|
| 1 () | 非常に有意義であった | } ……満足群 |
| 2 () | やや有意義であった | |
| 3 () | 普通…………… | 普通群 |
| 4 () | やや不満足 | } ……不満群 |
| 5 () | 非常に不満足 | |

(ロ) どのような点でそのように評価されますか。あてはまる () のなかに○印をいれて下さい
(1つ以上○をいれてもよい)

- | | |
|----------|----------|
| 1 () | 学業 |
| 2 () | 健康 |
| 3 () | クラブ活動 |
| 4 () | 家庭生活 |
| 5 () | 自己の生活 |
| 6 () | 生活態度・人生観 |
| 7 () | その他 |

附図 2

IV あなたの大学在学中(学生時代)と現在の健康状態についておうかがいします。

(イ) 下表の適当なところに、○印をいれてください。(四カ所、○印をいれてください)

		学 生 時 代		現 在	
		身体的健康度	精神的健康度	身体的健康度	精神的健康度
健 康……	非常に健康である	1 ()	6 ()	11 ()	16 ()
	比較的健康である	2 ()	7 ()	12 ()	17 ()
	普 通	3 ()	8 ()	13 ()	18 ()
不健康……	比較的不健康である	4 ()	9 ()	14 ()	19 ()
	非常に不健康である	5 ()	10 ()	15 ()	20 ()

↓
それぞれの列で一カ所○印をいれること